

令和7年度 奈良市立伏見南幼稚園 研究実践概要

園長名 西野 かおり

全園児数 19名

1. 研究主題 「人と人につながり主体的に活動する子どもをめざして」
～遊びや活動の中で育まれる力を見つめて～

2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

子どもを取り巻く環境が日々変化中、本園は園児数減少傾向にある。また、子育て環境も変化し、人との関わりが希薄で、生活経験や感動体験も少なくなりつつある。身近な“人・もの・こと”との関わりの中で、人と人とのつながりを大切にし、自ら主体的に動き出し、友達と意思を出し合い葛藤や挫折を乗り越えたり、達成した喜びを味わったりすることなどを積み重ねることが大切ではないかと考える。今年度は、園生活の中で、主体的に活動する子どもの姿や、人と人のかかわりの中で育まれる力を見つめながら、保育内容の見直しや工夫、保育者の援助や環境構成の在り方を探っていきたいと考えた。

4. 具体的な研究内容

① 研究のねらい

子どもが遊び、生活する中で、人と関わりながら育っていく力を見取り、主体的に活動するための保育内容や援助、環境構成の在り方を探る。

② 研究の重点

- ・保育者間の同僚性を高め合いながら、研究主題について共通理解し実践に取り組む。
- ・子どもの興味や関心を丁寧にみとり、人・もの・ことと関わりながら、子ども自ら主体的に活動している姿や人との関りの中で育つ力を捉えると共に、その要因について探る。
- ・子ども一人一人の発達段階をふまえ、子ども達の願いや思いが実現できるよう、保育者の援助や環境構成の在り方について再構成を行いながら、学びが深められるような保育内容の工夫に取り組む。

③ 活動の方法

【事例1】4歳児「信号は赤で～す」（6月）

ねらい ○ 友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。

○ 自分なりにイメージしながら遊びに必要なものをつくる。

(主体的に遊ぶ姿や人とのかかわり)

主体的に遊ぶ姿からの見取り

| 子どもの姿 保育者の援助・環境構成 | |
|---|---|
| <p>「車に乗ってお店屋さんに行こう!」と段ボールでつくった車で走っているA児を見て、次々に車に乗り走り始めた。楽しくなってくると、だんだんスピードが早くなってきたので、「スピード違反ですよ。安全運転をお願いします」と伝える。B児「僕はゆっくり走ってるよ」と話す横で、A児「私はパトカーだから」と「ウ～」とパトカーのサイレンの音を言いながら走っている。保育者が「でも、スピード出したら危ないね」と伝えると、それを聞いていたC児が思いついたように「信号があったらいいよね」とアイデアを出し伝える。保育者が「信号ってどんなの?」と聞くとB児「赤とか青とかあるよ」D児「赤になったら止まるの」と自分の経験を基に、口々に教えてくれた。</p> | <p>・園生活に慣れたことで、友達に目が向き、一緒に嬉しい、遊ぶことが楽しいと感じる。</p> |
| <p>保育者が「赤とか青とかになるようなもののお部屋に何かないかな?」と尋ねると、以前遊びに使っていた目印に使うマーカーを持ってきて嬉しそうに「これ使おう」と話す。マーカーを出す際に、赤や青など色を変え、C児が「赤で～す」と色を出すとみんな止まり、「青になりました」と青になると出発しながら遊んでいた。</p> | <p>・生活の中の「信号」という経験が遊びに出てきたことで、友達とイメージを共有し遊ぶ。</p> <p>・遊びで使っていたものから、イメージに合うものを使う。</p> |

しばらくすると・・・車に乗っていたD児が「車のライトがない」A児「バトカーの回るやつもいるよね」と必要なものに気付き、透明カップに折り紙を入れて色をつけたり、カップやプチプチに色をつけたりして工夫しながらつくり、バスにつけていた。

・遊びの中でイメージにあった素材や用具を考えつくる。

<反省・評価>

- ・園生活に慣れ、個の遊びから友達との遊びへ繋げてきたことで、友達の様子を見ながら「楽しそう」「やってみたい」と刺激を受け、友達のしていることに興味をもち「同じことをやってみたい」「一緒がいい」とイメージを共有し、知っている知識を出しながら遊ぶことができた。
- ・子どもの思いを受け止めながら、それぞれのイメージを認めたことで、サイレンを鳴らして早く走ったり、ゆっくり走ったり自分なりに表現しながら車を走らせる姿になったと感じた。また、スピードを出したら危ないと感じたことから「信号があるよ」と、うまくいく方法を考え、友達に知らせたり、必要なものを遊びに取り入れたりしていた。

【事例2】5歳児 「しゃぼん玉の容器、何色にする？」 (6月)

- ねらい ○ 自分の思いを伝えたり、友達の思いを聞いたりしながら話し合いを進める。
 - 友達の考えを受け入れながら色を決める方法を考える。
- (.....主体的に遊ぶ姿や友達とのかかわり)

主体的に遊ぶ姿からの見取り

| 子どもの姿 保育者の援助・環境構成 | 自分の欲しい色を素直に友達に伝える。 |
|---|---|
| <p>シャボン玉遊びを楽しみにしていた子ども達に、ピンク、水色、黄色、黄緑のシャボン玉容器を床に並べ、色や数をみんなで確認し、「好きな色の容器を相談してみんなで決めようか？」と保育者が提案する。子ども達は、嬉しそうに「ヤッター！」と大喜びし、話し合いが始まる。全員が顔を見合わせ輪になると、すぐに「僕は黄色がいい！」「私はピンク！」と自分の欲しい色を口々に話し始めた。</p> | <p>友達の思いを聞き、意見をまとめる。</p> |
| <p>その様子を見たA児は、「じゃあ、ピンクがいい人は、手をあげて！」とクラス全員に言葉を掛けながら順番に聞いている。しかし、聞いていくうちに、分からなくなってきたようで、「ちょっと待って！○○ちゃんは何色がいいんだっけ？」と聞き返している。困っているA児の様子に気付いたB児が「ねえ、色ごとに集まったらどう？」と提案する。A児は「うん！それいいね、そうしよう！」「そしたら、ピンクがいい人はこの辺に集まってくれる？」と身ぶり手ぶりで集まる場所を分かりやすく示し始めた。その声を聞いた子ども達は、言われた場所に分かれ、A児の話に耳を傾け、色の場所に移した。すると、黄緑色のシャボン玉容器は2つしかないのに3人いることに気づいたA児は、「黄緑はシャボン玉が2つなんだけど3人だから、黄色に1人だけ移動してほしいねん！」と黄緑の所にいた子に話し、お願いする。A児の話聞いて、黄緑の3人のうち、C、D児が「黄色にいてもいいよ！」と自分の思いを話す。A児は困ったように「1人でいいねんけど...じゃあ、どうやって決める？」と、C、D児に聞くと、「にらめっこがいい！」とにらめっこが始まった。</p> | <p>困っているA児の様子を見て、何とかしたいと考え提案する。</p> |
| <p>なかなか勝負が決まらず困っていると、C児が「私が黄緑にする！」と友達の思いを組みながら決める。A児はもう1人に「○○くんは、それでいい？」と聞くと納得したように「うん、いいよ！」と答え、無事に決めることができた。話し合いの行方をじっと見守っていた周りの友達から自然と拍手が沸き、全員が満足した様子だった。</p> | <p>誰が見てもわかるようにわかりやすく伝える。</p> |
| | <p>友達の思いを大切にしながら話す。</p> |
| | <p>友達のことも自分のことのように考えていたからこそ、自然と拍手が沸く。</p> |

<反省・評価>

- ・日々、色々な場面で話し合いをし、子ども同士で決める経験を重ねてきた。決まった数の容器を決めるためにどのようにすればいいかを問題提起し、子どもの思いを大切に聞きながら解決方法が見つけられるように見守ってきた。上手くいかないことを整理し、色、数、決める方法など、みんながわかりやすい方法を考えながら話を進める姿に繋がった。
- ・4歳児の時から自分の思いを伝えることや友達の思いを聞くことの大切さを伝えながら保育を進めてきたことで、友達との信頼関係を重ね、友達のことがわかり、困っている時には一緒に考え助けたり、友達にわかりやすく伝える方法を考えたりする姿になったと感じた。

【事例3、4】5歳児から4歳児へ遊びの伝承

運動会で、5歳児のリレーを見ていた4歳児が「リレーやりたい！」と憧れの気持ちをもちながら見ていた。運動会后「どうしてもリレーがしたい！」と勇気を出して5歳児に「リレー教えて」と伝えるとすぐに「いいよ」と承諾してくれた。その言葉を聞いてホッとしたようで、嬉しそうに5歳児について行く。5歳児は、リレーをしながら、やり方を教えてくれた。

5歳児 「まかせといて！」 (10月～11月)

ねらい ○ リレーのやり方を伝えながら、自分達で遊びを進める楽しさを味わう。

○ 年下の友達へのかかわり方を考えながら一緒に遊ぶ。

(主體的に遊ぶ姿や友達とのかかわり)

主體的に遊ぶ姿からの見取り

| 子どもの姿 保育者の援助・環境構成 | 頼られることを喜び、「任せといて」と意気揚々と遊びを進める。 |
|---|---|
| <p>運動会が終わり、運動会ごっこで遊んでいたある日、4歳児うさぎ組が数人「リレー教えて」「一緒にしたい」とやってきた。それを聞いてすぐに「いいよ。一緒にしよう」と頼もしい返事をする。</p> <p>うさぎ組の子ども達は嬉しそうについていくものの、どうしていいのかわからず戸惑っている様子にA児が気づく。「この服を着るよ」と水色、緑色のビブスを渡し、「後ろに番号書いているから順番に並んで」と、うさぎ組の様子を見守り、困っている子には声を掛けながらビブスの番号の順番に並べていた。並べ終わると「ちょっと待っててね」と話し、友達と一緒に手分けしながら手慣れた様子で三角コーンをコーナーの線に置いて準備し始めた。準備が終わると、「このバトンを友達に渡すからね」とうさぎ組に説明し、「ここに並んで」と線を指さし、並ぶと「よーいどん」とリレーが始まった。</p> <p>実際に走ってみると、うさぎ組の友達は見様見真似でしているため、ルールが曖昧でトラックの内側を走ったり、バトンを渡す人や走る順番がわからなくなったりしてなかなか上手に進まなかった。A児は困ったように「ちょっと集まって」とみんなを集めると、「この線の中は走ったらダメだよ」「次は○、その次が△が走るんだよ。」と、うさぎ組の友達にもわかりやすいように動作を交えながら知らせ、ルールを確認する。うさぎ組の友達もA児の話に耳を傾け真剣に聞いていた。しばらくリレーを繰り返し、上手いかないことがあるとみんなが集まり、ルールを確認しながらリレーを進める姿が見られた。うさぎ組の友達が、だんだんルールがわかり、リレーが上手いくようになってホッとした表情で見守っていた。</p> | 運動会の経験から、自分達で場を設定する。 |
| | 交流を重ねてきたことで、互いのことがわかり、信頼しながら一緒に遊ぶ。 |
| | ルールが上手く浸透していないことに気づき、年下の友達にわかる伝え方を工夫する。 |

〈反省・評価〉

・生活の中で、必要なものを自分で用意し、1人でできないことは友達と協力したり、役割を決めたりすることを大切にしてきた。子どものできる力を信じ、見守りながら任せてきたことで、上手いかない時には話し合いをし、自分達で問題解決しながら遊びを進める姿に繋がった。

・4月から、4、5歳児で交流を重ねてきたことで、安心して関わりながら遊ぶ姿が見られた。また、5歳児は年下の友達ができたことで、頼られることがうれしくなり、「任せといて」と自信を持って遊びを進めたり、「何かしてあげたい」と思う気持ちが大きくなったり、4歳児に優しく接しながら一緒に遊ぶことができた。

4歳児「リレーしよう」(12月)

ねらい ○ 教えてもらったことを自分たちなりに再現しながら遊ぶ。

○ 自分の気付いたことや感じたことを伝えながら友達と一緒に遊ぶ。

(主體的に遊ぶ姿や友達とのかかわり)

主體的に遊ぶ姿からの見取り

| 子どもの姿 保育者の援助・環境構成 | 自分たちのしたいことを友達に伝えながら遊ぶ。 |
|---|------------------------|
| <p>12月のある日、「リレーしよう」と話しながら園庭に行く。いろいろな遊具が入っている体育倉庫に走っていくと、リレーの道具が入ったワゴンを取り出し、「何番にしよう」「緑がいい」など話しながら準備を始めた。</p> | |

自分たちの選んだビブスを着終えると、三角コーンを取り出し、にじ組がやっていたように「これがある」と見様見真似で置いている。準備を終えると「私、よーいどんっていう人にする」「1番に走りたい!」と役割などを決めながら、リレーの走る順番に並びリレーが始まった。

繰り返し走っていると、走っている友達の様子を見ていたA児が「ここはだめだよ」とB児にトラックの線を指さしながら伝えた。B児が、「なんで?なんでダメなの?」と納得いかない様子で尋ねると「ここに三角(コーン)置いてるよ。ここはだめやで」と一生懸命伝えるが、上手く伝わっていない様子だった。しばらく様子を見守っていたが2人の間に入り、「三角コーンが置いてなくても線の中は入ったらダメってこと?」とA児の伝えたいことを確認しながら話すと、「うん」とうなずいた。それを聞いたB児も言われていたことがわかったようで、「わかったそういうことか。線の中は入ってた?」と尋ねる。A児は伝わったことにホッとした様子で「入ってたよ」と話し、ルールを確認しあい、次のリレーが始まった。

A児に教えてもらったことで、次のリレーの時には線の内側に入らないように気を付けながら走るB児の姿があった。

5歳児に教えてもらったことを思い出しながら必要なものを揃え、見様見真似で準備する。

それぞれの役割を決めながら遊びを進める。

5歳児に教えてもらったことを思い出し、ルールが曖昧なところを知らせ確認する。

子どもが納得できたことで、ルールの共有ができた。

<反省・評価>

・5歳児に遊びを教えてもらったことで、リレーのやり方や役割がわかり、友達と協力しながら準備を進めたり、何をしたいかを話したりしながら役割分担し、遊びを進めることができた。また、友達の姿を応援し、じっくり見る中で、ルールが違うことに気づき、友達に提案し解決する姿になった。

・5歳児のリレーの様子を見たことで興味をもち、「楽しそう」「やってみたい」という気持ちや憧れの気持ちが芽生え、5歳児に教えてもらおうとする姿が見られた。また、一緒に遊ぶ中で教えてもらったことを吸収し、遊びが伝承され、リレーが自分達の遊びとなった。

5. 研究の成果

○4月から意図的に異年齢交流を重ね、子ども達が動き出すタイミングを逃さず、自然な交流ができるようにしてきたことで、互いのことがわかり、4、5歳児一緒に安心して遊ぶ姿が見られた。5歳児は4歳児から頼りにされたことで自信をもち、自己肯定感が生まれ、また、昨年度の5歳児に優しくしてもらった経験から、4歳児に寄り添いながら優しく接し関わっていたため、4歳児は5歳児に憧れの気持ちをもち、「同じことをしてみたい」と5歳児から刺激を受けながら様々な伝承が行われ共に育ちあう姿となった。

○子どもが動き出す姿を待ち、自分のしたいことがすぐに実現できるよう、様々な素材や用具を用意し、取り出し使いやすい環境を整えたことで、自分のイメージに合ったものを見つけ、自ら用意しながら遊ぶ姿が見られた。また、子どもが自分で考えたことや実践したことなどのプロセスを大切に捉え認めてきたことで、主体的に活動する姿が多くなってきたと考える。今後も子どものもっている力を信じ、何を感じているのか、どんなことがしたいのかを子どもの目線で考えていきたい。

6. 今後の課題

小規模園ならではの良さを生かし異年齢交流を重ね、互いに刺激を受けることで遊びの中での好奇心を育み、様々な経験を積みながら育つ姿が見られた。しかし遊びたい場に友達がいない時は一緒に遊ぶことが叶わず、友達がいる別の遊びに合わせてしまう場面もあった。自分好きな遊びが十分できる環境と共に、友達とも一緒に関わりながら遊べるような環境を工夫していきたい。

日々、主体的に活動する子どもの姿を見つめ、継続して話し合いを重ねてきた。少人数のため、大人と関わることや、すぐに言葉をかけがちになってしまうこともあったが、職員間で子どもの姿や主体的に遊ぶための援助や環境を共有したことで同じ目線、同じ視点で子どもを保育することができるようになった。今後も少人数の良さを生かし、同じ方向を向きながら保育をすることで、子どもの育ちや学びの力を育み、子どものもっている力が発揮できるように、支えていきたい。